慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	貨幣に対する社会的信認
Sub Title	
Author	萩原, 吉太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.4 (1933. 4) ,p.515(19)- 542(46)
JaLC DOI	10.14991/001.19330401-0019
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330401-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

貨幣に對する社會的信認

萩原吉太郎

目次

序、一、貨幣本質なる名辭の意義　二、金屬主義の貨幣本質觀、金屬主義に陷り易き理由、金屬主義の論據　三、職能學說の貨幣本質觀　四、國家的學說の貨幣本質觀、指圖證說に含まるる一眞理　五、指圖證說の貨幣本質觀に對する二解釋　六、力としての貨幣本質觀、貨幣の一般流通性　七、貨幣存在觀と其變遷、抽象計算單位說批判、貨幣單位の意義　八、預金貨幣　九、貨幣職能の意義及び種類、其經濟的重要性の變遷、貨幣の國際的職能　十、貨幣價値の二要素、貨幣價値の特質　十一、貨幣價値否定論批判、貨幣の主觀的價値と客觀的價値　十二、貨幣價値變動に關する四學說　十三、貨幣の成立　十四、金の意義と其變遷、金本位制の基礎、金本位制の將來

序

歐洲大戰當時に於ける不換紙幣の濫發は貨幣論上の王座を占めてゐた金屬主義を沒落させたが、更に現下の金融恐慌は貨幣現象に於ける心理的要素の重要性を示し、貨幣理論の再吟味を促すに至つた。現下の金融恐慌を以て信認の失墜又は動搖の結果となすことに就いては殆ど意見が一致してゐる。本稿はこれを貨幣の本質、價値、生成等の根本的問題に結び着けて考察せんとするものである。今や金本位制は壞滅に瀕し、世界の幣制は未曾有の危機に

立つに當り、金本位制研究への第一歩として貨幣理論に於ける心理的要素に就いて若干の考察を試むるものである。

一

貨幣とは何であるかを知らずに貨幣現象を正解することは不可能である。貨幣を定義することは凡ゆる貨幣理論及び貨幣政策の出發點である。而して貨幣を定義するには第一に貨幣の本質を見出さねばならない。貨幣の本質とは貨幣をして貨幣たらしむるもの、即ち貨幣が貨幣たる爲に不可缺なものの謂である。從來此本質なる名辭の意義は必しも理解されてゐなかつた。或は此本質を擔ふ存在其物に關する見解を以て貨幣本質觀となし、或は貨幣の生成の前提條件に關する見解を以て貨幣本質觀となす者が多く、此爲に貨幣本質觀は著しく混亂に陷つたのである。故に貨幣の本質を研究するに當り本質なる名辭の意義を牢記することが極めて肝要である。

從來の貨幣本質觀を通觀するに、貨幣の本質を貨幣の素材に求むるものから貨幣の職能に求むるものに、貨幣の職能に求むるものから貨幣の力に求むるものへと推移せんとする傾向が認められる。即ち金屬主義は貨幣の素材に求むるものであり、職能學說は貨幣の職能に求むるのであり、國家的學說及び指圖證學說は貨幣の職能に求むると同時に貨幣の力に求むるものである。而して貨幣の本質は貨幣の力に於て發見される。

二

クナップに依り金屬主義と呼ばれた學派は貨幣の本質として貨幣素材が價値を有すべきことを主張するものである。此學派は貨幣も亦一の財貨に外ならぬと見るものであるから貨物貨幣說とも呼ばれる。ロッシァーが貨幣に關する誤つた定義は二つに分れ、其一は貨幣を貨物以上に解し、他は貨物以下に解するものであると說いたのは貨幣が財貨に外ならぬことを指摘したものである。

併し此學派と雖も貨幣概念を構成するに當り貨幣の職能を考察するもので、此點に關して何等名目主義と異るところがない。例へば現代の代表的金屬主義者たるラフリンは「貨幣の職能に就いて明確な理解に到達すれば、當然貨幣なる名辭の意義が見出される」(The principle of money, p. 1)「貨幣なる名辭の用法に就いては見解區々として一定してゐないが、貨幣職能に關する見解が定まれば此問題は明かに解決する」(Money and prices pp, 2-3)と言つてゐる。

唯金屬主義が名目主義と異るのは、前者は或職能を果すもののうち其素材が經濟價値を有するもののみを指して貨幣となすに對し、後者は貨幣素材が經濟價値を有するか否かを問題としないことである。即ち金屬主義は貨幣の本質を貨幣と貨幣類似の手段とを區別する性質と解したものの如くである。レキシスが「完全な貨幣とは全價値を素材のうちに保持し、從つて鑄潰しに依り地金屬に變へるも尙全價値を持つものである。今斯かる眞正な貨幣の外に貨幣の職能を果すも此眞正の貨幣たる理想に遠ざかり、一般的に言へば素材價値を有せざる支拂及び購買の手段がある。此種の手段を同樣に貨幣なる普遍的概念に包括する時は貨幣概念を正當に把握し、且つ諸種の貨幣種類を理論的組織のうちに整正し難いから、是等の手段は眞正の貨幣と區別して貨幣代用手段、又は貨幣代用物と言ふ」(Die Knappsche Geldtheorie in den Yahrbücher für Nationaloeconomie und Statistik. 32 Bd. 1906)となせるは最もよく此學派の見地を表明したものである。

斯く金屬主義は貨幣と貨幣代用手段とを區別する性質として貨幣の有價値性を擧げ、是を貨幣の本質となしたが、貨幣と同一の職能を果すものの間に素材の價値の有無に依り差別を設け、或は貨幣となし或は貨幣とせざるが如きは全く其理由を見出し難い。貨幣の本質は貨幣と貨幣職能類似の職能を果す他の支拂手段、交換手段とを區別する

のみならず、貨幣と財貨とを區別するものでなければならない。貨幣の素材が財貨と同一の價値を持つと言ふことは貨幣と財貨とを區別するところのものではなく、從つて貨幣の本質とは稱し難い。金屬主義は貨幣の職能に依り概念を構成しながら、其うちに貨幣の本質を認めようとしなかつたのである。然し彼等の貨幣の本質と考へたことは實は貨幣の本質に關するものではなく、貨幣の成立に關するものに外ならない。

金屬主義の上述の主張が貨幣の本質に關するものか、貨幣の成立に關するものかは暫く措いて、何故に金屬主義は斯かる見解をとるに至つたか。是は專ら貨幣發生當初に金屬を必要としたことや金屬貨幣を中心とした從來の貨幣制度に捉れて、貨幣現象の發達を看過したこと及び金屬主義を採れば必ず金本位制に導かれ、名目主義を採れば必ず不換紙幣制に導かれるとの謬見から、戰爭、財政難其他の非常時にのみ採用された不換紙幣制に對する非難を其儘名目主義に加へた爲めである。

併し金屬主義者自身は是等のことを勿論意識してゐないので、金屬主義者が金屬主義採用の論據として主張するのは貨幣の基本的職能たる價値尺度たるにはそれ自ら價値を持たねばならないと言ふことである。例へばフラリンは價値の共通的表示者たることを以て基本的職能となしてゐるが、彼は「價値の標準として選ばれた財貨は常に價値を有するもので、狩獵、遊牧、農業及び商業のいづれの段階に於ても財貨は一般から尊重されてゐるが故に貨幣として選ばれた。此普遍的慣習には確たる理由が存するのである。價値を持たぬものを以て他の財貨の交換價値を表示し得ない。小麥の價格を空氣又は日光を以て表示することは出來ない」(Money, credit and prices, Vol. 1 p. 25)と述べ、又クニースは「諸種の財貨の經濟價値を評價し測定する爲にはそれ自ら經濟價値を持つもの、經濟財に依つてのみ可能であることは言を俟たぬ。貨幣に關する學理や實際上にて見受ける誤解や愚論は專ら財貨の價値は唯同じく經濟價値を有する他の物體に依つてのみ測定され評價されることを看過した爲である」(Das Geld, S. 148)と言つた。此フラリン及びクニースの見解は金屬主義者の最も汎く採用してゐる論據である。

三

上述の如く、金屬主義は貨幣の職能を考察したが、其うちに貨幣の本質を求めようとしなかつた。反之、職能學說は貨幣の本質を貨幣の職能に於て求めるものである。職能學說の代表者たるウオーカーは「貨幣は何かの問題は貨幣は何をなすかの問題を通してのみ解答されるもので、貨幣とは、或職能を果すものであり、果す凡てのものであり、果すものだけである」(Money in its Relation to trade and Industry, p. 1)と述べ、自派の立場を鮮明に示してゐる。職能學派の一部のものは貨幣の職能を貨幣にのみ特有の作用であるとなしてゐるが、此立場よりすれば貨幣の職能即貨幣の本質なのである。併し貨幣に特有な職能が貨幣の職能たることは勿論であるが、他の物に存在してゐても貨幣が顯著に有してゐる職能であれば貨幣の職能となすべきである。大多數の職能學說論者は貨幣の職能を基本的職能と派生的職能又は附屬的職能とに分ち、基本的職能に貨幣の本質を認めるものである。換言すれば、彼等は此基本的職能を行ふ固有の地位を獲得したものを貨幣となすのである。貨幣の職能は多數に上るが、通常、一般交換手段と價値の尺度たる職能が基本的職能として考へられ、更に此二職能間の關係に就いて、一般交換手段を基本的とするものと、價値の尺度を基本的とするものと、兩者を全く並行的のものとして本末の區別なきものとなすものに分れ、更に最後の見地をとるも者は兩者を同一事實の兩面にして不可分となすものと可分なりとするものとに分れてゐる。

前述の如く、金屬主義は價値尺度を基本的職能となすに對し、職能學說は一般交換手段を以て基本的職能となす

ものが多い。例へばヘルフェリッヒは「歴史を見るに、一般交換手段は貨幣の最初の職能であつたものと見られる。又現代の經濟組織に於ても最も基本的職能であるばかりでなく唯一の基本的職能で、是に對し他の職能は派生的若しくは附屬的なものと見られてゐる」（Das Geld S. 242）と言つた。又メンガーもこれと同樣の陳述をなしてゐる。而して職能學說は此職能を通常の職能となすものが多いのである。ヘリフェリッヒは「貨幣とは一定の經濟領域及び經濟組織に於て經濟者間の流通（價値の移轉）を媒介すべき通常の職能を有する客體の總體である」となしてゐる。

彼等に從へば、貨幣とは一般的交換手段を職能とするものであるが、茲に一般的とは時、人、處の關係に於て限定せられざることを意味するものである。即ち彼等の見解は交換手段たることと同時にそれが一般的手段であることを貨幣の本質となすものである。而して一般的手段たることは取りも直さず一般流通性を有することに外ならない。金屬主義は此一般流通性の根基に遡つて、其處に貨幣の本質を見出し得るものと考へたのである。併し、斯かる見解が誤りであつて、貨幣の本質は一般流通性そのものを吟味することに依り發見されることが節を追つて次第に判明するであらう。

四

前述の如く、金屬主義は一般流通性の根基を金屬に求めたるに對し、國家的學說はこれを國家の法制に求めた。若しクナップが貨幣の本質を此國家の法制に求めたとすれば、彼は金屬主義と全く同樣な誤れる構想に陷つた譯であり、若し通用力そのものに求めたとすれば職能學說と相通ずるものである。

クナップは支拂手段と財とを對立させ、前者は流通的滿足を齎らせば足るも、後者は實質的滿足を與ふるを必要とし、貨幣は此支拂手段を上位概念とするものとした。從つて彼にとつて支拂手段は貨幣と財とを區別する性質なのである。此點に於てクナップも貨幣の本質を職能に求めたと見ることが出來る。次いで第二段に彼は貨幣と他の支拂手段とを區別する性質を求めたのである。若し彼がこれを國家法制の賦與する通用力に求めたとすれば、職能のうちに貨幣の本質を求め、同時に一般的手段（一般流通性を有すること）たることを必要とした職能學說と構想を同じくするものである。併しクナップは通用力よりも通用力を賦與する國家法制を問題とし、此點一般流通性の基礎たる金屬を問題とした金屬主義と同樣に貨幣成立の問題を貨幣本質の問題となしたものである。

クナップは支拂手段が社會的承認に依り成立することを認むるも、これが國家法制の認定を獲得して初めて貨幣となるとなすものである。故に支拂手段を顧れば、未だ貨幣たらざる支拂手段あり、現に貨幣たるものあり、更に既に貨幣でなくなつた支拂手段もあるであらう、換言すれば、支拂手段の流通性が國家法制に依り確保されることが貨幣を他の支拂手段から區別する性質なのである。故に「貨幣は法制の所產である」。彼は貨幣を次の如く定義してゐる。「獨逸語にて貨幣とは常に定形的な支拂手段を意味する。秤量的に取扱はれる定形的な手段もあるけれども、秤量的に支拂をなす限り未だ低い段階に立つもので、それは歴史的過程に於て克服されるものである。定形的支拂手段が制定的に通用力をもつとき初めて正確な觀察者に對して近世の意義に於ける貨幣が存在するのである。此時支拂手段は表券的制度を持つ。故に吾人は與へられた問題に對して次の如く答ふることを得るであらう。貨幣とは常に表券的支拂手段を意味し、凡ての表券的支拂手段を吾人は貨幣と呼ぶ」（Staatliche Theorie des Geldes, S. 30-31）

五

一般流通性又は一般收受性は凡ゆる學派に依り說かれてゐるが、唯金屬主義と國家的學說とは一般流通性の根據

たる素材の價値又は國家法制を以て貨幣の本質に答へ、職能學說は一般流通性を貨幣の本質となしたけれども、職能を重視して、これに附隨して一般流通性を說いたに過ぎなかつた。是を一つの力として認め、貨幣の本質として重視するに至つたのは指圖證學說である。

ベンディックセンは「經濟的に見て貨幣としての作用をなすもの、取引が貨幣と認むるものは貨幣である」(Das Wesen des Gelds S. 23)と述べた、貨幣としての作用をなすものを貨幣となすとは職能學說と同一の見地に立つものである。ベンディックセンは經濟上貨幣たる職能を果すものは凡て貨幣のうちに加ふべきものであるとして、クナップが貨幣のうちより除外せる預金貨幣をも貨幣(振替貨幣)となしたのである。併し、同時に彼は「貨幣の經濟的本質は前給付に依り獲得されたところの販賣場裡の消費し得る生產物に對する請求權である」(Das Wesen des Geldes, S. 30)「貨幣は共同體の爲になした給付を示す票券で、既になされた給付に基いて反對給付を受ける權利である」(Vorwort zur Geld u. Kapital)と說いた。

ベンディックセンの所謂「請求權」とは其獲得の原因即ち社會に對して給付をなしたことが條件となつてゐる。從つて貸付、割引に依り取得した預金貨幣は貨幣でないと言ふことになり、前揭の陳述との間に矛盾を生ずる。併し暫く此點を不問に附し、ベンディックセンは貨幣の本質を一方に於ては貨幣の職能(彼に從へば支拂手段と價値の表示)に求め、他方に於ては貨幣の力(請求權)に求めてゐるのである。

クナップ及びベンディックセンの流れを汲み遂に貨幣の本質を貨幣の力に求むるに至つたものはエルスターである。エルスターは其多元的解釋の故を以つて思想の混亂に導くものとして非難されてゐるが、彼の貨幣の定義は吾人に對し幾多の示唆を與ふるものである。彼は貨幣に關し一、社會的生產物に對する參加可能性、二、社會的生產物に對する參加測度の三箇の概念を揭げてゐる。第一の抽象的貨幣概念はベンディックセンの「請求權」に該當するものである。唯彼はベンディックセンと同じく是を以て社會的生產物の構成に寄與したことに對する報酬であることを認むるも、此取得原因を貨幣概念のうちに攝り入れなかつた。第二の概念は支拂手段に、第三の概念は價値單位に當る。即ち第二の概念は社會的生產物に對する參加可能性を移轉する爲に用ひられる凡ての對象を指し、第三の概念は參加可能性の讓渡(支拂)の大さの表現される單位のことである。エルスターに從へば、社會的生產物に對する參加可能性、社會的生產物に對する參加測度は凡て皆貨幣である。是等三箇の概念の第一の第二に對する關係は抽象的可能性が之を實現する具體的手段に對する如きものであり、第一の第三に對する關係は實體が數量に對し、支拂はる事物が計算される數に對する如きものであり、第二の第三に對する關係は尺度の測定單位に對する如きもので、是が貨幣概念の綜合である。三者は本性と內容に於て異れども、同時に成立し、其存在條件に於て相互に一の概念的窮極は他の概念的窮極を示すものである。(Seele des Geldes, S. 95)

斯くエルスターに從へば、參加可能性と參加手段と參加測度が共に同等の資格を以て對立し、此三概念が最後に何處で結合されるかが明白でない。私は第一の概念は貨幣本質觀であり、第二、第三の兩概念は貨幣存在觀であつて、是等綜合されて初めて貨幣が定義されると解釋することに依り彼の貨幣概念を整正し得ると思ふ。而して貨幣本質觀に該當するエルスターの第一の概念は一種の力の概念である。彼が購買力と貨幣とは同一物である(Ibid. S. 28)と言へるは適切に之を表現してゐる。私はエルスターの第一の概念に對する此解釋を移して自己の立場とし、貨幣の本質を貨幣の有する力に求めるものである。

六

貨幣の有する力とは貨幣が一般の財貨並に勤勞を購買し得る力のことである。而して此購買力は貨幣が一般の財貨並に勤勞を購買し得べしとの社會的信認の結唱と見ることが出來る。貨幣は社會的に斯く信認されること、換言すれば吾々が勞働の所產に易へて受取る貨幣に對し社會全體が對價を保證して呉れると信認することに依りて貨幣たり得るのである。此信認は歸納的斷定の性質を多分に持つと共に宗教的信仰に類似した社會心理的信仰を含むものである。茲に社會的と言ふが、其範圍は貨幣の種類を異にするに從つて廣狹あり、國際間に於ては金、一國家に於ては銀行券、金融機關を中心としては預金貨幣に付いて各々信認が成立してゐるのである。而して各貨幣が他貨幣に代替し得ることに依り各者統一連絡されてゐるのである。

凡ゆる財貨並に勤勞を購買し得る貨幣の此力を反面より見れば、凡ゆる財貨並に勤勞と引換に一般に收受される力に外ならない。古來言ひ古された「一般收受性」を突き詰めたところに貨幣の本質が發見される。フィシャーが何物に限らず財との交換の爲に一般に受領されるものを貨幣となし（Purchasing Power of money, p. 8）ロバートソンが財貨の代價又は債務の辨償として一般に收受されるものは凡て貨幣なり（money, p. 2-3）と云へるは敍述甚だ簡粗であるがよく貨幣の本質を捉へたものと言ひ得るであらう。

何故に貨幣の本質を素材又は職能のうちに求めず、斯かる力に求めるか。貨幣の本質を貨幣の素材の有價値性に求むる金屬主義に對しては敢て贅言するを要しないであらう。洵にベンディックセンの言へるが如く事實は言葉以上に有力にして、大戰は學問上に於ても金屬主義に終焉を告げさせたのである。解明を要するは何故に貨幣の本質を貨幣の職能に求めないかと言ふことである。第一に數多の貨幣の職能を本質的とか又は派生的とかに區別し得るのは職能の背後に或目標たるべき中心點がなければならず、又本質的職能も或場合は他の經濟財に依り果され、而も之を貨幣とは言はないのは貨幣と此經濟財とを區別する標識が職能の外に存すると見ざるを得ない。然るに貨幣の本質を貨幣の有する此力に求むるとき斯かる問題は發生せず、而も貨幣理論の全機構が最もよく整正統一され、而もよく貨幣現象を說明することが出來る。從來の貨幣理論に於ける一欠陷は本質、職能、存在性、價値、生成等の根本問題に關する見解の間に何等の論理的統一なく、全く獨立せる問題なるが如くに取扱はれてゐる。貨幣の本質を上述の如く解するとき此欠陷は除去されること以下順次是等根本問題に論入するにつれて判明するであらう。

七

上段縷述せるが如く、貨幣の本質は財貨並に勤勞を購買し得る力である。併し此力が貨幣ではない。貨幣とは斯かる力を擔ふ存在其物である。貨幣其物の存在性に關する學說發展の跡を辿るに、貨幣の種類を鑄貨に限局する金屬主義の立場から紙幣、銀行券或は預金貨幣をも貨幣に加ふる名目主義の立場に進み、遂には貨幣素材の實體價値のみならず、其具象的存在をも否定して、貨幣を一の抽象的計算單位と見るものを生ずるに至つた。具象的貨幣と抽象的貨幣との二種の貨幣の意義を說くものは遠くモンテスキューの les monnoies réelles と les monnoies ideales. スチュアートの money-coin と money of account に於て認められ、近くはベンディックセン、エルスターの抽象具體二元說に認められるが、貨幣の抽象性を最も强く提唱せるものはリーフマンである。

リーフマンは交換經濟的職能として從來の通說と同樣に一般的交換手段を擧げ、本質として一般的收受性を提唱した。即ち彼に從へば交換經濟に於て何人も nehmen するもの即ち貨幣である。更に彼に從へば、現時の交換取引

に於て、斯かる職能を果すものは大部分所謂具體的貨幣ではなく、單に相殺され、差引計算され、決濟されてゐるに過ぎない私的の無形的支拂方法並に決算方法である。此私的の支拂方法並に決濟方法は決して具體的貨幣の代表者ではない。夫自體が貨幣である。而して是等私的の支拂方法並に決濟方法の本體をなすものは價格や所得が計算され表現されてゐるところの抽象的計算單位に他ならないから、今日の經濟社會の實際に於て此抽象的計算單位が貨幣である。(Grundsätze der Volkswirtschaftslehre S. 91-106. Geld und Gold, S. 35-50)

リーフマンの此見解は貨幣單位に關する認識不足の上に築かれたものである。貨幣單位を一定量の金屬なりとする金屬主義の誤謬なるは勿論、全然抽象的なる貨幣單位を貨幣となすことも誤謬である。一般的交換手段たる職能を果す貨幣單位はリーフマンの言ふ如き單なる貨幣單位ではなく、財貨並に勤勞を購買し得る力を擔へる貨幣單位である。私は貨幣單位を支拂の大きさとなすことには反對しないが、之が直ちに貨幣の職能を營むものではない。財貨並に勤勞を購買し得る力と結合してゐる貨幣單位が職能を果すのである。而して斯かる力を具有することは同時に其貨幣單位が實在性を有することを意味するものである。實在性を有せざるものは斯かる力の所在を證明し得ない。故に抽象的計算單位を以て貨幣となすは誤謬にして、何等かの實在性を取得したる計算單位のみが貨幣である。

今日經濟財の有する價値は數的客觀的に表示されてゐる。此表示をなしてゐるものは我國の圓、英國の磅、米國の弗の如き計算單位であつて貨幣自體ではない。此計算單位は又貨幣の有する、財貨並に勤勞を購買し得る力を數的客觀的に表示する單位にして、普通貨幣單位と呼ばれてゐる。如何にして經濟財の價値は此貨幣單位に依り客觀的に表示されるかと言ふに、其は同一の單位に依り表示される貨幣と交換されるからである。此意味に於て、貨幣は財の價値の客觀的表示の手段と言ふよりは客觀的表示の支持手段と言ふ可きであらう。之を反面より見れば、貨幣の一般の經濟財並に勤勞を購買し得る力の大きさが特殊の財又は勤勞の價値にて表示されることで、之は貨幣と財又は勤勞との交換成立に依り實現される。從つて貨幣の價値の客觀的表示手段と一般的交換手段とは實は同一現象の二側面に他ならない。

八

上述の如く、貨幣は抽象的存在ではなく、具象的存在である。貨幣を具象的存在とすれば次に之は鑄貨の如き其素材が有價値のものに限るべきか、或は素材の價値の有無に問題なく、紙幣、銀行券をも含む具象的存在であるか、或は更に單なる帳簿上の記入たる預金貨幣をも加ふべきかが問題と成る。右の内第一、第二の見解に付いては敢て贅言する迄もなく、第一の見解は謬説、第二の見解は正説として既に決定されてゐる。問題となるのは第三の見解である。

預金貨幣を貨幣から除外するものの主要な論據は預金貨幣は limited acceptability を有するが general acceptability を欠くと言ふことである。例へばフィシャーは政府證券、爲替手形特に小切手は貨幣に類似の交換作用を有するも、是等は一般に收受されないから貨幣でない (Purchasing power of money, p. 10)となした。事實小切手は鑄貨、銀行券に比し其一般性は制限されてゐるけれども、貨幣の一般收受性とは一支拂團體に於ける一般收受性で、從つて其支拂團體の廣狹に依り其一般收受性の廣狹がある。世界全體として見たる支拂團體に於ては專ら金が貨幣であり、一國全體として見たる支拂團體に於ては鑄貨、紙幣、銀行券が主に貨幣であり、銀行なる一機關を中心として形成された支拂團體に於ては預金貨幣が貨幣である。銀行と取引關係を有する人々の間に於ては煩雜な計算が

省かれ、現金運搬に伴ふ危險が除かれる爲に小切手は鑄貨、紙幣、銀行券よりも授受される。現に世界主要國の支拂の大部分は小切手に依り行はれてゐる。謂はゞ各種の貨幣は一の貨幣から他の貨幣への代替性に依り統一されつつ各々其使用上に於て分業が行はれてゐるのである。

預金貨幣を貨幣として認むるとしても、預金夫自體を貨幣となすことに對しては異論が多い。例へばロバートソンは吾々が小切手を貨幣と呼び、預金其物を貨幣と言はないのは預金は小切手の形をとるまでは、適正に貨幣とは言ひ得ないからである（money, p. 49）と述べてゐる。眞に銀行預金は箇片に非ざるが故に鑄貨、銀行券の如く直ちに移轉し得ない。銀行預金は小切手を用ひて移轉される。乍併小切手は銀行預金移轉の一方便に過ぎないのである。貨幣を實體價値を有する箇片に限らんとする思想から脱却した今日に於ても貨幣を箇片に限らんとする思想が普及してゐるが、貨幣が箇片であるか帳簿上の記入であるかは問題ではなく、一支拂團體に於て財貨並に勤勞を購買し得る力を有する實在であれば貨幣である。其移轉の形式が鑄貨、銀行券と異るが故に貨幣でないとするのは長く鑄貨、銀行券の使用に馴された結果で、本質的問題と技術的問題とを混同せるものと言ふ可きであらう。

九

上述の如く、貨幣とは一支拂團體内に於て財貨並に勤勞を購買し得る力を有する具象的存在である。而して斯かる力の發動の狀態を指して貨幣の職能と呼ぶ。貨幣の職能は之が觀察の見地に依り各樣に映じ、其數に限界がない。一般に一般交換手段と價値の尺度とが最も本質的な職能とされてゐるが、他の職能は決して此二職能に倚存するものではない。各職能間には全然從屬關係なく、凡て悉く貨幣の有する前述の力の發現に外ならない。貨幣の職能は悉く其根原に存する力より放射すと言ひ得るのである。又諸職能の重要性は經濟狀態の變遷につれて變化するが、如何に或職能が重要性を增大するとも、其爲に他の職能が之に倚存するに至るものでない。

貨幣の職能としては、古代希臘に於て夙に交換手段、價値の尺度及び價値の貯藏の三職能が說かれ、今日ではヘルフェリッヒの如きは allgemeines Tauschsmittel, allgemeines Zahlungsmittel, Vermitter von Kapitalübertragungen, allgemeines Wertausdruck, Wertträger durch Zeit und Raum の五職能を擧げ、アンダーソンの如きは Common measure of value, medium of Exchange, Legal Tender for debts, standard of defered payments, Reserve for credit instruments, Store of value, Bearer of options の七職能を認めてゐる。是等幾多の職能のうち古來最も主要な職能とされてゐるのは一般交換手段と價値の尺度（價値の客觀的表彰手段）とである。

一般的交換手段は財の交換に着目して說かれた職能、即ち一財と他財との交換を媒介する手段である。交換手段と類似の職能に支拂手段なる職能あり、之は財の交換のみならず寄附、租稅の如き一方的移轉をも包括してゐる。交換手段と並んで支拂手段を說くものは一般的交換手段を以て蔽ふことの出來ない一方的移轉に於ける職能を補足せんとするものである。乍併、財の交換に關する限り、交換手段も支拂手段も同一なる貨幣の活動を示すもので、只前者はW—G—Wなる一聯の關係として觀察するに對し、後者はW—GとG—Wとの二つに切離して其一側面を觀察したものである。前述の如く、貨幣職能の重要性は經濟狀態の變遷に隨伴して變化するものであるが、此事は交換手段と支拂手段との關係に於て認められるところで、流通經濟の發展と國家法制の發生との結果として、支拂手段としての重要性は次第に交換手段としての重要性を凌駕しつつある。又ヘルフェリッヒは交換手段、支拂手段と相並で資本移轉手段なる職能を提唱した。彼は資本が貨幣の形態に於て存する時は貨幣以外の財として存するときよりも其使用性の殆ど無限な結果として容易に放資されるので、貨幣は特に資本移轉の手段たるに適すと（Das Geld, S.

252-254）說いた。此職能が經濟機構の發展とともに重要性を增加して行くことは疑なきところで、吾人は貨幣の交換手段としてよりも營利手段としての姿が强まり行くことを認める。以上の三職能は對人的な財の移轉に關する職能であるが、他方時間的又は場所的な財の移轉に關する職能が古くから認められてゐる。價値の貯藏と稱せらるる職能であるが、經濟狀態の變化は他の職能に於けると同じく此職能の上にも大きな變化を齎した。金融機關、有價證券投資の發達とともに、貨幣を庫中に貯ふる代りに銀行、信託に預金し、有價證券に投資するに至り、此職能は著しく重要性を失ふに至つたのである。（預金貨幣は鑄貨、銀行券に代つて益々此職能を果しつつあると見ることが出來る）

一般交換手段と相並で主要な職能として擧げらるるものは價値の尺度なる職能である。嚴格に言へば、價値の尺度なる名辭は恰も一定の長さを有する物指が他の未知の長さを測定するが如くに貨幣の價値が諸財貨の價値を測定することを意味するもので、貨幣は必ず素材價値を有し、且つそれが一定不變でなければならない譯である。然るに貨幣素材の價値は變動し、又素材價値なき不換紙幣も亦價値尺度の職能を果してゐるから、此用語は正當とは稱し難い。之に比すれば價値の尺度と言はずに價値の一般的客觀的表彰の手段と言ふ方が正しい用語である。價値の客觀的表彰と一般的交換手段との二職能は相互に獨立せるものではなく、同一現象の二側面に他ならない。貨幣が交換の媒介として作用することに依り、貨幣の財貨並に勤勞を購買し得る力は特殊の財貨又は勤勞に具體化され、同時に財貨又は勤勞の價値の客觀的表彰を支持するのである。

如上の諸職能は夫々の貨幣の屬する支拂團體の領域內に於てのみ發揮し得るものである。銀行券は其屬する國家を超えて他國家に及ばざるに對し、金は世界各國が金本位制を維持する限り、或は其復活が期待さるる限り、世界的に如上の職能を發揮し得るもので、此故に金は國際的通貨である。而して金が國際通貨たることは謂はば國際的職能とも稱すべき一つ貨幣職能を生ぜしめた。前述の如く金本位制の下に於ては銀行券は金に代替し得べく從つて一國の通貨は金を通して他國の通貨に代替し得べく、即ち金は一國の通貨を一定率を以て他國に代替せしむる職能を果すものである。

十

一支拂團體內に於て財貨又は勤勞を購買し得る貨幣の力の發現を指して貨幣の職能と呼ぶこと前節に說けるが如くである。而して此貨幣の職能に依り貨幣の有する此力に對する信認の强度が表現され、此信認の强度が貨幣價値の一要素をなすものである。即ち一支拂團體にて財貨又は勤勞を購買し得る貨幣の力に對する信認と貨幣獲得に對する人爲的障害とに依り貨幣の價値は生れるのである。

抑々價値は一の客體が一の主體に對して「欲望されるもの」として對立することに依り生まれる。換言すれば、或對象が吾人の欲望を滿足せしむる可能性を有すと認められると共に他方其享樂に到達するには鬪爭と勞苦とを要することが、吾人に對し「欲望されるもの」として對立するに至らしめ、之に因り價値は生れる。之を貨幣に就いて見るに、貨幣は決して直接に欲望の充足には役立たないが、吾人の欲望を充足すべき一般の財貨並に勤勞を購買し得る力を有すと認められてゐるが故に欲望される。價値の基礎たる欲望の對象たることは吾人の欲望を直接に充足し得るものに限局すべきでない。勿論手段は目的系列を離れては全然欲望の對象たり得ず、手段が欲望されるのは目的が欲望されるからであるけれども、手段其者が恰も終極目的たるが如くに手段を取扱ふことは精神的運動の一般形式である。貨幣と財との關係のみならず、一般の手段と目的とを精密に考察するときは個々の目的も最終的のもの

と見るべきでなく、人間の意欲及び評價の途は無限へと進み行くもので、如何なる點も前方からは究極と見えながら、回顧すれば單なる手段としてしか妥當し得ない。貨幣は其價値を手段的性質、即ち他の價値に轉換し得る性質に負ふもので、貨幣がより純粹な手段となるにつれて、換言すれば、貨幣に依り獲得される對象の範圍が擴大して、對象が一層貨幣の力に服するにつれて、貨幣の意義は增大し、遂には價値自體として妥當するに至る。絕對的手段たる貨幣が心理的には絕對的目的となり、而も現代に於ては國家又は中央銀行が貨幣發行につき排他的特權を有し又銀行は或程度の支拂準備金の必要に制約されて、貨幣獲得に對し人爲的妨害が加へられてゐるが故に、貨幣は價値を有するに至るのである。

十一

貨幣には人間の評價が缺けてゐるとの理由で貨幣價値を否定するものに指圖證學說がある。エルスターの所說に從へば、賣買は交換と異り、賣買にては評價が提供すべき財貨即ち貨幣に及ばない。交換に於ける經濟者の評價思惟を分析すると、一、他の財貨を獲得する爲に提供すべき財貨の使用價値　二、欲求する財貨の使用價値　三、欲求する財貨を獲得する爲に提供し得べき他の總ての財貨の使用價値　四、欲求する財貨の代りとして獲得し得べき他の總ての財貨の使用價値の四つの使用價値に關する評價が含まるるに對し、賣買に於ては、一、欲求する財貨の使用價値と二、其代りとして獲得し得べき總ての財貨の使用價値に關する評價と三、欲求する財貨が更に廉價に獲得し得ざるか否かの考量に限られてゐる。即ち交換は各當事者が彼に提供される財貨を反對給付として欲求される財貨より高く評價し、次に彼に提供される財貨を他の之より低く評價される財貨を以て獲得し得ず、最後に欲求される財貨を以て提供される財貨よりも高く評價される他の財貨を獲得し得ない時に起る。然るに賣買に於ては、買手が欲求する財貨の爲に貨幣を讓渡し、此貨幣額で獲得し得べき他の總ての財貨の獲得を斷念し、他方、賣手は代金にて獲得し得べき他の財貨の爲に、財貨を手放すもので、兩者ともに財貨の使用價値を評價して貨幣を評價しない。故に貨幣は一切の價値の前提たる人間の評價を缺くが故に貨幣は概念上價値を持ち得ない。（Seele des Geldes, S. 18-21.）

果して貨幣は評價されないであらうか。吾々は手離さんとする貨幣を評價せずして其貨幣にて購入し得る他の財貨の使用價値を評價するものであらうか。吾人は日常の購買を繰返してゐるうちに、一定の貨幣が如何なる財を購入し得るかを知り、それに依つて綜合的に貨幣の價値を構成してゐる。之は疑もなく財貨の使用價値の反映として生れるものであるけれども、或財を買入れるに當り當該單位の貨幣で購入し得べき凡ゆる財の使用價値を腦裡に浮べるのではなく、一つ〳〵の財から獨立して貨幣自體に對する評價が既に成立してゐるのである。物價平準は物價指數に依り表現されるが、各個人の腦裡にも其日常購入する財の價格から主觀的な局部的な物價平準が形成され、それを土臺として其購入せんとする財の價格を判斷してゐると見ることが出來る。

吾人の貨幣に對する評價はそれまでに事實上成立せる客觀的な價格に支配されてゐるのである。謂はゞ各個人の貨幣價値判斷は社會大多數の價値判斷に追從し、之と同時に各個人の判斷はやがて社會的綜合的價値判斷の形成に參與するものである。或財の價格が吾人が之に提供してよいと思ふ貨幣量よりも小なるか又は同一なるときに吾人は財を購入し、而して此購入に於て、貨幣の側から見れば、貨幣の交換手段としての職能が果され、又財の價値の客觀的表彰が支持されてゐるのである。若し此價格が大なりと思ふときは吾人は之を購入せざる可く、斯かる人が多ければ、賣手はついに此價格を引下げざるを得ないのである。

財の價格を變更するものは賣手であるが、併し賣手は結局買手の判斷に追從するものである。商人が或商品を購入するのは其商人自身の消費に供する爲ではなく、利益を得て他に轉賣せんが爲である。從つて其商品に對して認むる價値の大小は之に依り營利の目的を達し得る見込如何であり、營利の見込の大小は消費者多數の其財に對して認むる貨幣に依り表彰された價値に依り支配される。財が原始生産の階段から最後の消費者の手に達する迄には通常多數の生産及び商業の階段を經過するものであるが、其中の何れかの階段に於ける企業者の價値判斷は其次に立つ企業者多數の價値判斷に依り定まり、結局は最後の消費者の評價が決定的要因となるのである。

十二

貨幣價値變動の因果關係を個人の評價作用に遡つて求むる主觀說は夙に十七、八世紀の交より存してゐたが、從來客觀說に壓倒され、これが擡頭は比較的最近のことである。即ち十七、八世紀の交に於ては、ロック、ヒューム、モンテスキュー、ダヴァンザッチ等の論者を有した機械的數量說が最も行はれ（拙稿「スミス以前に於ける貨幣價値論の二潮流」）降つて十九世紀に入りてもカルドオ、ミル等の正統學派の需要供給法則は市場關係としてこれを說き、貨幣に對する需要をば人間の心理作用に代ふるに貨物を以て表現するに止まれる結果として機械的數量說と同一の形態をとるに至つた。（拙稿「貨幣數量說と貨幣本質觀との論理關係」）主觀的貨幣價値論の擡頭はウィザーの所得說が貨幣價値に限界效用說を適用せるに始まり、次いで需要供給法則もマーシャルに至つて心理的色彩を加味し、ケインズ、ロバートソン、キャナン等と共に Casr-Balance theory と呼ばれるに至り、遂にはアフタリオンの心理說の生誕を見るに至つた。固より現代に於ても機械的數量說は頗る旺にして、フィシャー、カッセル、ケメラー等の有力な論者を擁してゐるが、客觀說より主觀說への轉向の傾向は否み得ない事實である。是等四學說に付いては他日稿を改めて詳述するであらう。

大體に於て、貨幣數量說が貨幣價値變動の原因を貨幣流通量の增減に求めたるに對し、所得說は貨幣量增減を以て貨幣價値變動の主要な要素たることを認むるも、此貨幣量增減が各個人の所得に影響を及したる限りに於て貨幣價値に影響すとせるに對し、心理說は所得の增減を以て貨幣價値變動の主要な要素たることを認むると同時に、此所得增減が各個人の主觀的評價に影響を及したる限りに於て貨幣價値を變動せしむるとなすものである。

心理說は貨幣價値變動の直接原因を主觀的評價作用に求むるもので、假令所得が同額であつても、消費の態度、節約心の大小、將來の豫測に依り貨幣の主觀的價値の異ることを示した。過去に於ける貨幣の客觀的交換價値のみならず、將來に於ける貨幣の客觀的交換價値に對する豫測をも、現在の各個人の貨幣の主觀的交換價値の基礎とするところに心理說の顯著な特徵が認められる。

心理說の有力な主張者たるアフタリオンは次の如く述べてゐる。最近の貨幣現象殊に爲替相場に基く物價變動は第一に貨幣數量說を全然否定するに至らしめ、次に所得說を半ば否定せしむるに至つた。獨逸に於ける麻紙幣の歷史は爲替相場が直接に物價に影響することを示した。爲替相場の變動は直ちに卸賣價格をも小賣價格をも等しく變動させ更に國際市場から隔絕せる商品にすら速時に反動を及した。貨幣數量說論者の或者は此現象を說明するに貨幣流通速度の增加を以てした。乍併、流通速度の變化を以て之と同時に發生する物價變動を說明し得ず、又購買力が百億分ノ一になるやうな物價騰貴を來すほど流通速度が增加したとは考へられない。更に流通速度に因る物價變動は或る心理的變動、即ち評價の變動を前提とするもので、流通速度の增加は務めて早く貨幣を手離さんとする欲望の結果である。爲替相場は世界の注目してゐる貨幣の對內價値のバロメーターである。爲替相場變動に因る貨幣

の對內價値の變動は數量說の主張する如く流通速度の介入、所得說の主張する如く所得の介入を俟つて行はるるものではなく、對外價値の評價下落から直接に發生するものである。更に貨幣價値暴落の經驗は心理的要素が貨幣の對內價値の說明に役立つことを示した。爲替相場變動と同樣に、物價騰貴の豫測は直接に貨幣價値の下落を招來するものである。(Monnaie, prix et change p. 196-201)

十三

洵に貨幣の主觀的價値は之に前行する客觀的價値と將來の客觀的價値の豫測とを前提とすると同時に、之に後行する客觀的價値の前提をなし、主觀、客觀の兩價値が相互に因となり果となりつつ、貨幣の價値が昨日より今日へ、今日より明日へと變動して行くのである。然らば最初の貨幣の價値は如何にして成立したか。歷史的には、貨幣の價値は最初貨幣として使用された財貨の價値に其根原を有するもので、それが貨幣購買力に對する社會的信認が確立するにつれて、貨幣の價値が財貨の價値から分離するに至つた。換言すれば、貨幣の成立は同時に貨幣價値の成立に外ならない。

貨幣の起原に關し古くから存在する通說は貨幣を以て物と物との自然交換の困難を除去せんとする計畫的な產物となすものである。此說は貨幣が現在盡すところの職能から歸納して、其職能を盡さしめんとする計畫的所產となすものであるが、發達したる貨幣の形態は計畫的に考へられたものであるが、貨幣をば未開の社會にて人爲的に計畫したとは考へ難き事である。勿論物々交換に於ける不便が貨幣生誕の因緣となつたことは明白であるが、其故に人爲的に計畫されたとするは當らない。

右の說に比し一步を進めた說は、貨幣を以て一般流通性の大なる財貨から轉化したものとなしてある。即ち物々交換時代に於て流通性大なる財を以て市場に臨むものは他の財を獲得するに有利な地位に立ち、流通性大ならざる財を以て市場に臨みたる者は直接自己の必要とする財を獲得せんとすること勿論なれども、若し不可能な場合には一層流通性大なる財と交換し、斯くして次第に目的とする財に接近せんとするもので、茲に最も一般に交換される財のうちに貨幣は發生すると說く。

乍併、如何に流通性大なる財が上述の如き意識に依り收受されるに至つても、其財は依然として財の範圍から全然脫け出ることは出來ない。詳言すれば、其財の財としての使用價値を離れて貨幣としての作用を果すことは出來ない。斯かる財が完全に貨幣となるには交換當事者の間に第三者として社會全般の代表者、例へば國家の介入が必要である。

既述せるが如く、貨幣が貨幣たるのは、一般の財貨並に勤勞を購買し得る力を有するとの社會的信認が存在するからである。而して一般流通性の大なる財貨には多分に斯かる要素が含まれてゐることは事實であるが、貨幣が財貨から分離して貨幣たる姿を明白にするのは、兩當事者の間に第三者として社會全體が介入し、貨幣に對しそれに相當する價値が確保されること、即ち貨幣を發行し保證する中央政府が貨幣に刻印を附し單なる金屬量としての性質以上のものが與へられた場合である。

今日貨幣の購買力に對する政府の保證は貨幣購買力の强度に對するもので、若し政府が紙幣濫發に因り之を低下せしむること烈しい時は金又は財貨への逃避を誘ふであらう。政府發行の貨幣に次いで預金銀行を中心とする一支拂團體が形成されるに至り、預金通貨の生誕を見るに至つたが、此場合問題となるのは寧ろ購買力夫自體で、銀行の內容惡化すれば、銀行券、紙幣又は金への逃避を誘ふであらう。世界の大部分の國が金本位制を採用するに至れ

る時、金は國際的通貨であつて、金に一國の貨幣が結び着いてゐることは該貨幣に對する信認の幅員及び强度を上揚する所以である。今日、金が貨幣購買力に對する信認を支持してゐるのは其使用價値に因るものではなく、金が國際通貨たるが爲である。

十四

金の貨幣としての使用は極めて太古に遡ることが出來る。エレア哲學の始祖クセノファネスに依れば、西紀前第六世紀に於てリディア人が既に鑄貨を始めたと傳へられる。固より遙遠の昔に遡れば、鹽、家畜、烟草、穀物の如きものが原始的貨幣として使用されてゐた。乍併是等の物は結局は或個人に依り消費されるものであり、他の何人も其瞬間に於て其事に興味を持たず、全然個人的用途に屬してゐる。反之、貴金屬は其裝飾としての意義に依り個人間の關係を暗示してゐる。自己の優越を誇らんとする本能は古今東西を通じて極めて顯著な事實で、生活上直接の必要が充たされた後は何人も努めて裝飾品を能ふ限り多く蓄積せんとするもので、貴金屬や貝殼が鹽、烟草、家畜等を排して最も廣く貨幣として使用されるに至つたのも實に此爲である。殊に貴金屬は地理的に廣く分布し、從つて流通性大きく、且つ耐久力ある爲に最も貨幣として用ひられるに至つた。

併し國家に依り貨幣の購買力が確保されるに從つて貨幣に對する貴金屬の意義は次第に減退して行き、貨幣は次第に公的制度となつたのである。中央集權的社會圈と貨幣との關係がより密接となるにつれて、貨幣は其金屬價値に對し獨立するに至り、貨幣存在の根基は貨幣購買力の確實安定を保持する政治的中央權力へと移つたのである。

然らば何故に金は其他の貴金屬のうちから選ばれて本位となるに至つたか。一國の本位を決定するものは法制である。其決定に至る迄には各國皆夫々苦惱の經驗を嘗めたが、其根底に於て一つの共通の動因に依り支配された。

英國は十八世紀中、大陸諸國に比し金を少しく高く評價した結果、銀は次第に海外に流出し、之に代つて金が旺に流入し、事實上銀は本位貨幣たることを停止し、遂に金本位制へ移るに至つた。然るに英國は貿易上、金融上最も優越的地位を占めてゐたので、同國と共通の本位を有することは有利な爲に、同國の制度を模倣する國が續出した。直接に英國を模倣したと稱し難い國々の場合も有力な引力となつてゐたことは否み難い事實である。最初に英國に倣つて金本位に轉向したのは獨逸で、次いで獨逸と密接な關係を有してゐた丁抹、瑞典、諾威、和蘭等が相次いで金本位制を採用するに至つた。

斯く金本位制が採用されるに至つたのは何等金が本位たるに適する性能を有する爲ではなく、偶々經濟上有力な國家に金が著增した爲で、斯かる國と通商關係に在る國々が貿易上、金融上の便宜の爲に之を模倣した結果に外ならない。今日、金は國內的には貨幣の一般の財貨又は勤勞を購買し得る力の根基としての當初の意義は失はれて了つたが、對外的には世界主要國が金本位制を維持する限り尙其意義の一半を保有してゐる。即ち一國の貨幣が一定の割合で金を通して世界主要國の貨幣と連絡されることである。眞に此故に從來金本位制は無條件に禮讃されてゐた。乍併ブラケットが力說せる如く、金本位は他方に於て國內物價の安定を犧牲にしてゐたと見られる。（Planned Money, p. 63. 69）加ふるに現下の世界幣制の狀態を見るに、名實ともに金本位制を維持せる國は僅かに九ケ國に過ぎず、金本位停止國は二十三ケ國、之に法律上は金本位制を維持するも、金本位制の實を失へるものを加ふれば四十一ケ國に上る。今は正に金本位制の危機である。金本位制に殘された上述の對外的意義も失はれんとしつつある。

抑々金が國際通貨として國際貸借の最後の決濟手段たるは、世界各國が金を以て何れの國に於ても一般の財貨又は勤勞を購買し得ると信認してゐるからに外ならない。併し金の存在量には限度がある。從つて若し國際貸借のバ

ランスが失はれると結局債務國は債權國に對し支拂手段を失ふに至り、債權國が債務國に對して貸付、投資をなすか、又は物資の輸入を增加せざる限り、債務國は金本位制を維持し得ざるに至るのは當然の歸結である。大債權國民が金を獨占する如き方法を採るならば金本位制は存立し難きものである。

ストラコッシュは英國下院の金融及び通貨代議士會に於て、「英國の貨幣政策—經濟的繁榮への途」なる題下で左の如く述べた。「金本位制ほど廣汎な支持を受け易い國際的貨幣制度はない。併しそれには先づ金本位に對する信認が回復されねばならない。金本位を破滅に導いた政治的、經濟的、金融的な諸原因が除去されさへすれば、此信認は回復するであらう。此爲に最も重要な條件は次の如きものである。

一、賠償及び戰債問題の合理的解決

二、國際貿易に付いては、對外債務が原則として物資及び勤勞を以て支拂ふことを得、關稅引上其他の保護政策的手段に依り其支拂が不當に阻止せられざる狀態に立歸ること

三、金本位制運用の原則が確實に遵守されること、即ち金を自由に流動せしめ、如何なる國に於ても金の增加が物價の騰貴を來すと言ふ自然的作用を阻止して金を不當に蓄積せざること

四、金の價格が不必要に騰貴することを阻止する爲に、貨幣用としての金の節約實行に關して國際協定が締結されること、即ち金準備の最低限度を廢止すること

是等の肝要な保障なくては金本位へ歸ることは不可能であつて、假令可能であつても危險にして望ましからぬことである。我々は近き將來に於て上述の諸條件が滿されるものと豫期し得ない。これが爲には刻苦奮闘と今尙金本位を維持せる諸國の心持が根本的に變ることが必要である」（Feb. 25, 1932. London Times）カッセルも亦之と大同小異の意見を述べ、「金本位制の圓滑な運用は戰債の存續する限り不可能である。金本位制復活の第一條件は戰債の全廢である。戰債支拂延期の如きは何の役にも立たない。—第二の條件は國際貿易の適當なる自由と斯かる通商狀態の存續に對する保證と資本の國際的移動の自由が必要である。—更に中央銀行金準備に對する需要を激減せしめねばならない。最も有效な方法は金準備の最低限度に關する法律を全廢することで、國際聯盟金委員會提唱の法定準備の引下げの如きは不十分であり、國際協定に依つて引下げを實現せんとするが如きは殆ど不可能である。是等の諸條件を愼重に考慮するときは何人も短期間に實現を期待し得ざることを認むるであらう。金本位停止國は永久とまでは言はずとも數年に亙り不換紙幣制度を繼續する覺悟が必要である」（The crisis in the world monetary system, pp. 89-92）。

洵に金の偏在は金本位制崩壞の根本的原因であるが、乍併直接原因としては寧ろ貨幣に對する社會的信認の失墜の結果であることを認めねばならない。最近の經驗に徵すれば、金本位制離脫への經路は二つあつた。第一は外國人の或國からの資金の引揚で、之は爲替の崩落を招き金の大流出を來したが、此外資引揚は其國の貨幣の將來に對する外國人の信認の動搖に依り拍車を加へられたのである。英國の場合はこれに當る。第二は一國の貨幣の對外價値に對する自國民の信認の動搖の結果としての資本逃避で、南阿聯邦の如き其一例である。斯く過般の金本位制停止は國內又は國外の貨幣に對する信認の動搖の結果で、金の豐富は必しも金本位制の保證とはならない。

固より金を豐富に保有する國及び金產國は金本位制の復活に努力すべく、又爾餘の諸國も金融上、經濟上優越せる地位を占むる國と同一本位を有することは有利であるから、金本位制が永久に壞滅すべしとなすは早計に失するであらう。グレゴリーは「金本位制の廢止は米佛兩國の利益に相反するものである。兩國は世界の金の大部分を占む

るを以て、金本位の破滅に依り莫大な値下り損を來すであらう。又世界の金產國殊に南阿の如きは痛擊を蒙るであらう。故に是等諸國は一時は金本位停止の止むなきに至るとも、根本的には其復活に努むるに至るであらう。又永久的制度としての通貨管理は世界の經濟界及び一般社會の大部分には奇矯なものであり、喜ばれてゐない。更に又海外投資は米佛兩國に俟つ外なく、而も是等二國は確實な金本位制を有せざる國に對しては自由に投資せざるべきことを記憶すべきである。是等の諸點は金の世界的永久的沒落の起り得ざることを示してゐる。」(The Gold Standard and its future, pp. 80-81) と述べてゐる。乍併上述せる金本位制復活の諸條件が滿たされざる限り金本位は沒落するものと見るも敢ち無稽とのみ斷じ去ることを得ない。各國の爲替管理の徹底と各國中央銀行の協力とは金に代るに修正せられたる物々交換の發達を促す可能性もある。斯かる國際決濟方法が確立し、各國の物價が安定すれば、軈て金を離れて一國の通貨に對する國際的信認を生ぜしむるであらう。金の豐富を誇る國も金の窮乏に惱む國も金の獲得に狂奔するに先ち金本位制の將來に就いて冷靜に考察する必要ありと思惟するものである。

英國急進運動第一期概觀

——その發端よりフランス大革命勃發時まで——

濱田恒一

序

茲に英國急進運動とは、凡そ一七六一年の頃より第十九世紀中葉に至る英國デモクラシー運動殊に議會改革問題を中心とする運動の謂ひである。その本質は產業ブルジョアジーの政治支配獲得運動たることである。

急進運動は屢〻中產階級運動であると言はれる。この見解は、この運動の初期に於いて、直接その事に當つた人人が中產階級出身であつたといふ意味で、肯定される。亦、この運動の盛時に於いても、中產階級が主力としてその任に當り、且つ之に依つて、自己の政治的權力を獲得せん事を企圖したとの意味に於いて眞である。併しこれで以て、直ちに該運動を中產階級運動と規定する事は輕卒である。

この運動の初期、即ち第十八世紀の末葉に在つては、生氣ある Middle Class は、やがて後に產業ブルジョアに發展し行ける階級であつた事を忘れてはならない。亦、中產階級が之に依つて政治的權力獲得を企てた事は、否、進んで之を多少獲得した事は、決して、彼等の「政治支配」が確立した事を意味するものでなく、この運動の總括的成果は、却つて此運動が產業ブルジョアの政治支配運動であり、中產階級はいはゞ運動の物理的勢力としてお先